

平成29（2017）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（文化・人間情報学コース）
入学試験問題
専門科目

（平成28年8月22日 14：00～16：00）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. 本冊子は、文化・人間情報学コースの受験者のためのものである。
2. 本冊子の本文は6ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
3. 解答用紙1枚を使うこと。裏面を使ってもよい。このほかにメモ用紙が1枚ある。
4. 解答用紙の上方の欄に、受験番号を必ず記入すること。受験番号を記入していない解答は無効とする。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 日本語で答えること。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙、メモ用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入せよ。

受験番号	
氏名	

文化・人間情報学 問題

次の (A) (B) 2つの文章を読み、問1から問3までの質問に、問いの番号(問1から問3まで)をつけて日本語で答えなさい。問題全体(問1から問3まで)で解答用紙1枚を使いなさい。ただし裏面を使ってもよい。

(A)

自明のことではあるが、歴史学の研究は資料を読むことから始まるのではない。これは詭弁ではなくして、少し反省してみれば、当然理解できることである。資料を手にする前に、あるいは図書館に赴く前に、ひとはすでに歴史に関わるための mind-set をそなえているはずであり、そのための訓練を受け、そのために必要な知識を身につけているはずである。資料はまずそこにある何かではなくて、探し出して自分の前に置くものである。資料はまず選択されて、そこに置かれる。なぜそのような作業が可能になるかと言えば、すでにその資料について何かを知っているからであり、歴史的な知識があるからである。教師から教えをうけたのか、すでにある歴史記述を読んだのか、ともかく何らかのかたちで修得された知識と mind-set が初めに来る。歴史学に赴く、資料に向かうというのは、すでにある歴史の研究のシステムの中から出てくる行為なのである。最初にあるのは歴史のとらえ方、歴史の解釈の仕方、既存の歴史記述というシステムであって、資料ではない。歴史の研究はすでにあるイデオロギーと権力の中から出発するのであって、資料はむしろそれに同意するか、抵抗するか、あるいは曖昧に妥協するための場になると考えるべきであろう。資料を読むのは出発点ではなく、すでにして中間点である。

資料を読むとは、具体的には、どのような作業であろうか。何らかの文書を前にして過去の歴史を想像するというのは、具体的には何を、どのように想像することなのか。しかも歴史学者がつねにこのような想像上の過去の世界に定住しているはずはないのであって、その過去の世界と自分の生きている現代の間をたえず往来しつつ、それらを二重に重ねあわせているはずである。そのとき、想像された過去の世界が過去の歴史的な事実に関わっているととしても、その関わり方に何らかの影響を及ぼさずにはいない歴史家の現代における関心のありようは、その過去に対しては他者として、つまりその過去が知り得なかった一種のフィクションとして機能するはずである。現在という時間の中において過去の資料を読み、それを解釈するということは、その過去にとっては未在の絶対的なフィクションでしかない未来(つまり、われわれにとっての現在)の侵入をうけるということである。しかし過去の資料はこのように、過去の時点においては未在の未来というフィクションを通過しないかぎり、われわれにとっての現在の内には届きようがないのである。われわれにとっての<事実>としての<現在>を、

<事実／フィクション>として過去に投射するのは、歴史学という学問としては避けて通れないプロセスであるだろう。

ここにある問題を別の角度から浮彫りにしてみせるのが外国の歴史の研究である。この場合の最初の、しかも重要な問題は、資料そのものが研究者にとっては外国語で書かれているということであり、歴史の中の事実を云々する以前に、その外国語がどこまで正確に読めるのかという問題が絡んでくるはずである（日本では、外国の歴史を研究する人々の語学力がどのようなかたちでチェックされているのか、私は知らない。英文学の研究者としての経験からすると、話し書く能力と、テキストとりわけ難解なテキストを読む能力は正比例しないことが多い）。そもそも外国語の資料を読むとはどういうことなのか——実は解釈の正確さ以前に厄介な問題がある。それはわれわれが、殆んどの場合、外国語の資料を読みながら、その意味を日本語によって理解しているということであり、その成果が例えばイギリスの英語の資料を読んで日本語で論文を書くというかたちをとるのである。そして、この一見自明とみえるプロセスが含む理論上の問題は考察の対象にすらならないのだ。端的に言えば、ここにあるのは外国語の資料に対して、その資料にとっては他者であるはずのひとつのフィクションをかぶせるという行為のヴァリエーションと考えてもいいだろう。そして、そのように考えるとすれば、日本人が外国語の資料を読むというときには、その読むという行為そのものの中にフィクションが介入し、フィクションこそがその読みを可能にするという構造が存在することになる。

この問題は外国の歴史の研究にのみついてまわるわけではない。人類学者のフィールドワークには当然この問題がついてまわるし、日本史の場合も同じである。例えば平安時代の資料を現代の日本語で理解するときが、そうである。図像資料を言葉で読み解くというときにも相同性の問題が発生する（この問題は、突きつめてゆけば、ベンヤミンが取りあげ、ポール・ド・マンがさらに追求した<翻訳>の問題に辿りつくはずである）。

文学の研究においてはこの問題が、ある意味では、はるかに絶望的なかたちをとる。その絶望の深さを示すために、ディケンズの英文で900頁位ある小説を読む場合を考えてみることにしよう。研究者がそれを読みとるプロセスでも十分に日本語が介入してくるし（辞書を引きながら読む場合はそのあからさまな例）、いざ、それを批評、研究しようという段階にいたって、作品の中に書かれていたことを想起しなければならないとき、よほど例外的な人でないかぎり、ディケンズの小説を日本語で想起するはずである。英文を読むとしても、記憶の中にあるのは日本語であり、それを日本語で研究する——外国文学の研究には（あるいは一般に、外国語の資料を読むときには）このメカニズムがほぼ必然的についてまわるのである。しかも、このメカニズムこそが外国文学の研究を支えているのだ。問題はもともとのテキストが、あるいは資料が何語で書かれているのかとい

うこと以上に、何語によって読みとられ、解釈され、記憶され、想起され、そこに何語によるコメントが介入してゆくのかということである。そのプロセスで、もともとの資料あるいは作品、テキストに対してある種のフィクションと呼ぶべきものが関与してくるとというのが、私の考えである。歴史と文学を〈事実〉と〈フィクション〉の対立として処理してしまうようなやり方では、あるいはこの対立の図式を温存したままで、両者に共通する〈物語〉を云々するようなやり方では、問題の解決にはならないであろう。

話を先に進めるならば、歴史家の仕事は資料を読みとるだけで終るわけではなく、そこからしかるべきデータ（つまり、歴史的事実）を選択、抽出して、それを論文や本のかたちにまとめてゆかなくてはならない。そのまとめあげにさいして、ヘイドン・ホワイトが指摘するように四通りの物語の様式が絡んでくるのか、モーリス・マンデルボームのようにそのような考え方を全面否定してしまうのかどうかはさしあたり措くとして、そのまとめあげの絶対的な指標となるのが①日付けというフィクションであることは疑い得ない。実証主義の史学にとってこの日付けは絶対の、したがって疑う余地のない前提である。実証主義の史学は、出来事の間因果関係を時間的（日付け）、空間的にできるかぎり細密に提示することを目的とし、そのことによって日付けのフィクション性を忘れてしまおうとする。このような実証主義を、可能なところでは温存しながらも、いわゆる実証的な因果関係の設定ができないところにも何らかの歴史的な関係性を想定してゆこうとする文化史（サイモン・シャーマの『風景と記憶』とか、英文学の分野におけるニューヒストリシズム）、あるいはフーコー的な系譜学にしても、決して日付けのフィクションから自由なわけではない。実証主義史学をかかげる人々が、その内実をほとんど理解できないままに非難の対象としているポストモダンの歴史学にしても、同じことである。歴史学と文学研究の関係を考えるためには、事実かフィクションかという考え方自体を解消するところからスタートするのが妥当であろう。あるいは他のルートもあるのかもしれないが、私自身はそこからスタートする。

（富山太佳夫『文化と精読』2003年、名古屋大学出版会）

(B)

理論なき経験的資料は盲目であり、資料なき理論は空論であるという論議は、社会科学のどの学派においても十分になされている。この問題について私は哲学的な粉飾を試みるよりも、実際になされていることとその結果を検討するという方法で考えてみたい。ラザスフェルドのかなり率直な表現では、「理論」や「経験的資料」の実際の意味はきわめてわかりやすいものになっている。「理論」とは統計的に発見された事実の解釈にとって有効な変数のことであり、「経験的資料」とは実際の作業にあたって強く表現され立証されているとおり、多くの反復的で計測可能な、統計的に規定された諸事実諸関係に限られている。理論と資料とがこのように限定されたものである場合には、その相互関係についていくら豊富な議論がなされても、その論旨は畏縮してしまわずかばかりのことを承認するというだけの、事実上何ごとも承認しないという方向に走ってしまう。理論や資料の概念をそのように限定する哲学的根拠はないのであって、すでに述べたように、社会科学の成果からみても明らかにその理由はない。

広大な概念構成を抑えながら適切に再構成していくためには、確かに詳細な説明の根拠が必要であるが、②詳細な資料を加算していけば広大な概念構成に到達するとは限らない。詳細な資料的基礎として何を選ぶべきか？ その選択の基準は何か？ 「加算」とはどういうことか？ それは簡単にいわれているほど、機械的なことではあるまい。広大な概念化と詳細な説明根拠（理論と調査）との相互作用について考えると同時に、われわれは問題そのものについても考慮しなければならない。社会科学の問題は一般に社会的・歴史的構造に関連する用語によって表現される。もしそうした問題が現実的なものであるとすれば、頭から小規模な地域の微視的研究にとりかかるということは、その研究が構造的な重要性をもった問題を解明するのにたしかに有効であるという推論ができないのなら、そこからどんな成果がでてくるにしても愚かしいことではないだろうか。すべての問題をバラバラの諸個人とそのバラバラの個人的生活状況にかんする、統計的であれ何であれ、バラバラの情報を追いまわすバラバラの試みとしか考えない立場をとっている限り、われわれはそのような問題を正しく「翻訳」していることにはならないのである。

どんなに詳細な調査研究をやったとしても、それに投入した思想より以上のものを結果から回収できるということは稀にしかおこらない。実証的調査から直接入手できるのは情報であるが、情報をもとにして何ができるかということは、調査者が研究作業を進めるにあたって、その調査研究を巨視的な理論構成のチェック・ポイント（逆止め装置）として選定したのかどうかという点に、大きくかかっている。科学製造人が社会哲学を経験的研究に転換させ、その住み家として調査機関を設立していくなかで、膨大な数の研究が製造されている。そしてそこに

は、これらの研究主題の選択を方向づける原理や理論などは何もないというのが実態である。われわれがみてきたように「しあわせ」は主題の一つでもあろう。またもう一つは市場行動である。あの〈方法〉が適用されていさえすればよいのだ、そうした研究成果は——エルミラやザグレブから上海にもわたってばらまかれているが——積み上げられ、やがては人間と社会にかんする「成熟」した組織された科学に成長する、と信じこんでいるのである。こうして一つの研究はつねにあとに続くを信じるものとなる。

このような研究を「加算」していってもそれ以上の重要な結果を生み出しはしないという場合、私は抽象的経験主義が実際に志向する社会理論を考慮に入れている。いかなるスタイルのものであれ、経験主義は——何が最も現実的であるか、ということについての——一つの形而上学的な選択を含んでいるのであるが、ここでこの特殊なスタイルの経験主義が必要としている選択について考えてみよう。その場合私は、こうした研究がいわゆる心理学主義 (psychologism) をきわめてしばしば例証している点に注意したい。かれらの立場における資料源は標本としての個人であるという事実がある。そこで行われる質問は諸個人の心理的反応をみるためのものである。だから社会の制度的構造をこの方法で研究するという場合には、そのような調査資料によって社会の制度的構造の理解は可能であるという前提が置かれているわけである。

しかし構造の問題を考え、個人行動を説明するためにも構造が重要な意味をもっていることを知るには、もっとはば広い形の経験主義が必要であろう。たとえばアメリカ社会の構造のなかにも——またよく「対象地域」に選ばれるような、ある時点のあるアメリカ都市の構造のなかにも——非常に多くの社会的心理的な公分母があるわけで、社会学者が考えなければならないような行為も、そう簡単に手に入るものではない。どんな種類の行為を考えるかという問題設定じたいが、社会構造を比較的にも歴史的にも包摂しうるような観点に立つときのみ、意味をもつのである。ところが抽象的経験主義者は認識論的ドグマのゆえに、一貫して非歴史的無比較的である。かれらは小規模な地域をとり扱い、心理学主義に傾斜している。問題設定においても、発見された微視的な事実の説明においても、かれらは歴史的な社会構造という基本的観点を全く現実的につかっていない。

(C・ライト・ミルズ『社会学的想像力』鈴木広訳、1995年、紀伊國屋書店)

問1 問題文 (A) の下線部①「日付けというフィクション」は何を表しているか、本文に扱われていない事例を挙げて、300字以内で説明しなさい。なお、挙げる事例は歴史や時間に関わるものでなくてもよい。

問2 問題文 (B) の下線部②で著者は、「詳細な資料を加算していけば広大な概念構成に到達するとは限らない」と主張しているが、それはなぜか。著者が問題文の後半で展開している議論を踏まえ、そのような主張をする理由を300字以内で説明しなさい。

問3 問題文 (A) と (B) では、「翻訳」という概念がやや異なる形で使われている。それぞれの問題文は、「翻訳」することを、どのようなプロセスとして理解しているのかを説明しなさい。その上で、あなたが構想している研究に、問題文 (A) ないしは (B) の意味での「翻訳」はどのように関係するのか、自分の研究計画に即して説明しなさい。